

## クルグズスタンの革命

—— 社会ネットワークの活力と政治構造の不透明性 ——

宇山 智彦

2005年3月にクルグズスタンで起きた政変は、グルジア(2003年11月)、ウクライナ(2004年12月)での事件と並んで「カラー革命」と称され、CIS諸国で「民主化ドミノ」が生じつつあると言われた。その後「民主化ドミノ」が続いてはいないことは周知の通りだが、クルグズスタンなどで起きた事態が十分に分析されてきたとは言えず、そのことが、CIS諸国の政治潮流の把握が曖昧になりがちの一因となっていると思われる。

本報告ではまず、2005年2月の国会選挙前に始まった混乱から、各地での集会や街道封鎖、州庁などの占拠を経て、アカエフ大統領の逃亡とバキエフ政権の成立に至る過程を追った。次にアカエフ政権の性格を検討し、民主派大統領として登場したアカエフが、国内および国際社会向けのアピールのために民主派としての体面にこだわりながら、政権運営のモデルとしては他の中央アジア諸国やロシアの権威主義的な体制を参照し、矛盾した手法をとっていたことを指摘した。彼の就任時に既に存在していたエリートの分裂傾向がその後も克服されず、体制派エリートが次々と転向して反対派の力が強まったこと、彼の妻子ら家族・親族が政策への口出しや生活態度によって悪評を買い、大統領一家が国民の貧しさを顧みず富を貪っているというイメージが定着していたことも重要である。国会選挙前後の混乱に対する対応の拙さも、アカエフが当事者能力を失っていたことを示している。順調に国を運営していたのに陰謀で倒されたというアカエフ派の主張には根拠がなく、アカエフ政権は倒れるべくして倒れたと言える。

次に「革命」への民衆参加のあり方を検討するために、オシュ州庁占拠前後の様子を撮影したビデオの内容を紹介し、日常の秩序が一時的に転倒しカーニバル的な状態になっていたことを指摘した。動員のメカニズムについては不明な点が多いが、クルグズ社会の人類学的研究の成果を踏まえれば、市場経済化・自営農化に伴う貧窮化が深刻で、生活保障のための社会ネットワークの再構成が模索される中で、国会選の立候補者や後援者が現金や物品を投入し、あるいは明るい未来への期待を高めることによって、大規模な動員が進められたことが推測できる。一般に言われるような単純な「南部と北部の対立」ではなく、同一の選挙

区内・地区内の対立と中央政界での対立が結びつくことによって、革命運動が（南北の温度差を伴いながらも）全国化したのである。

革命はクルグズスタンの政治変動の一環として位置づけられるものであり、この変動はアカエフの逃亡では決して終わらず、その後も続いている。革命に参加した旧反対派の政治家たちは、一人一党的な分立状態にあり、アカエフ打倒のためには団結したものの、政権打倒以外の価値観は共有していなかった。南部出身のパキエフが大統領、北部出身のクロフが首相として組むことによって新政権が発足したが、大統領選挙も閣僚任命もぎりぎりまで引き延ばされる中で、複雑な権力ゲームが展開した。パキエフら民主主義に冷淡な古いタイプの政治家と改革を求める運動家たちとの対立に、大統領と政府と国会の対立、憲法改正問題、革命を背後から支えたと言われる犯罪分子の存在などが絡み合っており、政治構造の不透明さという点ではアカエフ時代と比べて改善されているとは言えない。

なお、アカエフ派らは革命がアメリカのシナリオによるものだと批判したが、実際にはアメリカが革命派を直接援助した形跡はなく、アメリカとつながりの深いNGOが革命で果たした役割も限定的である。パキエフらはどちらかといえばロシアとの関係が深く、実際に政権発足後は時として反米的な発言をしている。アメリカにしてもロシアにしても、グルジアやウクライナの場合と違いクルグズスタンの革命の際には積極的に介入しなかったことが、むしろ特徴的と言えよう。

結論として、クルグズスタンでの政権交代は、市場経済化などの社会変動に根ざし大衆運動を伴ったという意味で「民衆革命」と呼ぶことはできるが、政治体制の根本的変革はもたらさず、「民主化革命」にはならなかった。このことは、イデオロギーの役割が低下した冷戦後の世界における大衆運動の可能性と限界を示し、またCIS諸国、特にヨーロッパ志向が働きにくい中央アジア諸国での権威主義体制の根深さを表すものである。

付記：本報告をもとにした論文が、「クルグズスタン（キルギス）の革命：エリートの離合集散と社会ネットワークの動員」（『「民主化革命」とは何だったのか：グルジア、ウクライナ、クルグズスタン（21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集16）』北海道大学スラブ研究センター、2006年）として刊行されました。ウェブサイト[<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no16/contents.html>]からダウンロードできます。ご参照いただければ幸いです。

（北海道大学スラブ研究センター）